

みんなでやれば怖くない、のか？

死刑に関係する人々の責任

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

日本では死刑判決が確定すると、処刑場のある拘置所に収容されて執行までの日を過ごします。現在100人を超す死刑確定囚のうち約半数が小菅の東京拘置所で生活しています。

東京拘置所の処刑場のようすは8月27日に初めて公開されたのですが、さっそく様々なテレビドラマでもその様子が使われています。これまでだったら控えられていたような死刑執行のシーンも増えそうです。そんな残酷な場面を見慣れてしまうことも心配です。

死刑囚の足下の踏み板を開くボタンは3個あり、3人の刑務官が合図によって一斉にボタンを押します。執行に携わる刑務官の心理的負担を和らげるために、誰が押したボタンで執行したのかわからないようになっているということですが、それって結局「みんなでやれば怖くない」ということではないでしょうか？

☆☆☆

いよいよ、裁判員制度によって、死刑の可能性もある重大事件の審理が行われます。もともと、どんな誤判があっても、それで裁判官が責任を取ることはありません。それでも裁判員となって死刑の適用の是非を真剣に考えることは大変な負担でしょう。裁判員制度自体が、まるで職業裁判官のために執行ボタンの数を増やしてあげた制度のようです。

☆☆☆

厚生労働省の文書偽造事件で、検事による押収資料の改ざんが明るみになり、検察が独占してきた証拠の信憑性が疑われています。

東京拘置所には、40年以上無実を訴え続ける袴田巖さんもいます。検察批判の高まりも影響したのか、この事件で、検察はようやく未提出証拠の一部を開示しましたということです。検察は他にもどんな無実の証拠を隠しているかわかったものではありません。少なくとも、全ての証拠の開示をしないで死刑の執行をしてはならない、と私たちは考えますがどうでしょうか？

開示できない証拠とは、警察・検察が違法な手段によって得たり、ねつ造したものなのではないでしょうか。

☆☆☆

相撲の行司の持つ短刀は、判定を間違えたときには自害して責任を取る覚悟を示しているそうです。誤判によって死刑が執行されたとき、誰がどう責任を取るのでしょうか。大臣や官僚の辞任ですむことではありません。